くて愛を知らず

石川達三

稚くて愛を知らず　©一九六四

定価三九〇円

昭和三十九年十一月三十日　印刷
昭和三十九年十二月　五日　発行

著者　石川達三

発行者　宮本信太郎

印刷　三陽社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(561)五九二一～二九
振替口座東京三四番

稚(おさな)くて愛を知らず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

滋賀県の彦根町が市制をしいたのは、昭和十二年のことで、当時は人口三万五千ばかりの小都市に過ぎなかった。いまは人口も六万あまりに増加し、大きな紡績工場などが出来て、次第に工業都市に変ろうとしているけれども、その頃はまだ古めかしい武家屋敷がたくさん残っていて、さすがに落着きのある静かな街であった。伊井家代々の居城であった金亀(きんき)城のあとの小高い丘の上からは、琵琶湖が眼の下に見える。はるばると遠くまで煙って、どこまでも平たく見える。左手に比叡、そしてその北につづいて比良の峯が青く霞む。比叡の手前が大津。比叡を越えれば直ぐに京都につづく。このあたりは戦国時代から織田豊臣時代にかけての、歴史のあとが無数に残っているところだった。

城跡の丘から下の市街地に降りたばかりの、中段のようなところに、木造洋館の花村病院があった。入院患者のための病室が十六、看護婦が九人もいて、個人経営の病院としては一番大きい方であった。病院から庭つづきになったところに、赤い瓦ぶきの院長の住居がある。花村友紀(ゆき)子は大正二年の春、この院長の長女として生れた。彦根が市制をしくよりもずっと前のことだった。

友紀子は産れたその時から、まだ名前も何も無いのに、女であるからには、いずれはどこかの

男に求められて彼の妻となるものと、運命づけられていた。人間の運命は最初から二つに岐れている。二つのうちの一つしか与えられてはいない。産れた子が女であるか男であるか。……つまり友紀子には人生の半分しか与えられていなかった。女の子は女の人生だけしか生きることが出来ない。あとの半分は産れたその時から、既に奪い去られている。そして結婚とは、経験することの出来なかった人生、宿命的に失った半分の人生を、とり戻そうとする願望であるかも知れない。（――エホバ神、アダムより取りたる肋骨をもて女を作り、之をアダムの所に連れ来りたまえり。アダム言いけるは、〈是こそわが骨の骨、わが肉の肉なれ。是は男より取りたる者なれば、之を女と名づくべし〉と。この故に人はその父母を離れて其の妻に合い、二人の者一体となるべし）……。

友紀子の母伸子はわがままで依怙地な女であったが、この子が生れて一週間目、（お七夜）の日に、ようやく眼をひらいたばかりの小さなみどり児の頰に、うすく白粉をはたき口紅をつけてやった。それは友紀子の人生への祝福の行事であった。彼女の人生とは結婚以外には無い。良き結婚をすることだけが、良き人生を送ることだった。お七夜の日の化粧は、こうして置けばこの子の結婚の日に、それがよみがえって来て、美しい花嫁の化粧が出来るという言い伝えがある。その、根も葉もないような言い伝えを忠実に守ることのなかに、母の祈りが罩められていた。（この子がきれいなお嫁さんになりますように……。）

伸子が娘のために為し得ることは、花婿の心に沁みるような美しい花嫁に、彼女を育てあげてやることであった。それから後の二人の生活の幸福は、二人で作って行く。母はそこまでは立ち

入ることは出来ない。伸子は最初から、（嫁に行く女）として友紀子を育てた。結婚すること、妻となることだけが、友紀子の人生の目的として、課せられていた。それまでの二十何年が、すべて結婚の準備期間であった。それは友紀子がみずから選んだ生き方ではなくて、みな母から与えられたものだった。そしてそういう育て方が、当時は普通のやり方であり、最も正しい育て方だと考えられていた。社会に於ける男と女との生活の区劃ははっきりと別れていて、仕事をする女、外で働く女は下等な人たちのように思われていた。

三年ののちに弟研一が産れたが、友紀子はひとり父母の溺愛をうけて育った。そういう両親の態度をうけて、二人の女中も病院の看護婦たちも、友紀子を甘やかすことに同調した。そうすることが院長夫妻に気に入られることでもあったから、彼女等は誇張された愛情をもって友紀子に接したのだった。したがって彼女は幼少の時代を、何の抵抗をも受けないでぬくぬくと育ってしまった。彼女は全く鍛練ということをされたことが無かった。抵抗を凌ぐ意志の力、芯の強さというものを養われることなしに育てられた。友紀子はまことに可愛い少女だった。色白で、澄んだ大きな眼をしていて、蚕のように弱々しくやわらかな、きれいな娘だった。意地わるをされたことのない、苛められたことのない生活から、彼女は素直でやさしい少女になっていた。誰にでもなつき、誰をでも信じ、人を疑うことを知らない、天使のように清らかな少女だった。しかし人間の世界は天国ではない。そこに友紀子の人生の大きな危険があった。

彼女は愛情を受けることに馴れて、愛情を与えることを知らなかった。人形を愛し、花を愛し、小さな手芸品を愛することこど以外には、人を愛するというせつない感情を味わったことが無かった。

小さな弟の研一に対しては全く無関心だった。両親に対してはむしろ貪慾に愛情を要求するばかりだった。

少女時代の友紀子の生き方は、すべて受け身だった。受け身であるが故に、美しさと魅力とが必要な条件であった。彼女は自然に、彼女を愛してくれる人たち、保護してくれる人たちの中だけに引きこもろうとするようになった。したがって家から外の、他人の中にはいって行こうとはしなかった。彼女は学校が好きでなかった。友達もすきでなかった。友紀子の生活は成長するにつれて消極的になり、退嬰的になった。

彼女が十五、六にもなってから、母ははじめてその事を心配しだした。

「友紀子はどうなんでしょうね……」と彼女は良人に言った。「ちっとも外に出たがらないし、遊びに行こうともしないんですよ。少し遅れているのでしょうか。いつまで経っても人形をいじってばかりいてあれでいいんですかねえ。よその娘さんたちは宝塚に少女歌劇を見に行ったり京極の方へ映画を見に行ったりするらしいんですよ」

「うむ。まあそれは、人間のたちだな」と父は言った。「あまり出歩くことばかり好きな娘でも困るだろうからね」

「でも、嫁入り前に少しは世間のことを知って置く方が良いでしょう。あの子は学校のことだけしか知りませんよ」

「それはそれでもいいんだよ。あまり世間を知っている女というものも、何だか嫌らしいじゃないか。知らない位の方が、男から見れば可愛いもんだ」

院長花村徳太郎博士は多勢の入院患者を扱っていたから、女の生活の表裏をもよく知っていた。病気で入院している女たちは、かくす術もなく日頃の彼女たちの生活をさらけ出してしまう。院長は世間ずれのした中年の女たちの、あけすけな物言い、だらしなさ、わがままというものを、毎日飽きるほど見ていたのだった。友紀子をあんな風にはしたくないと思う気持から、父は友紀子の消極的な暮し方に、むしろ賛成だった。

しかし彼は或る夜、それとはなしに友紀子の気持を探ってみた。

「お前はいつもうちにばかり居るようだが、運動不足じゃないか」

「大丈夫よ。学校で体操をしているから……」

「うむ。少しは外へ遊びに行って見たらどうだ。京極でも行って見ようか」

「ええ……」

「映画はたびたび見ているかい」

「一遍見たわ。だけど、あんまり好きじゃないの」

「どうして？」

「だって、何だか怕いわ」と友紀子は言った。

「こわい？……何を見たんだ。時代劇か」

時代劇の殺陣を見てこわかったのだろうと父は簡単に考えていた。しかし友紀子が見たものは現代劇だった。それも平凡な悲劇だった。彼女にはそれが耐え難かったのだ。愛慾のもつれ、憎悪、逃走、情事、怒り……映画のなかの劇的な物語のすべてが、友紀子にとっては（怕い）もの

だった。要するに彼女には人間社会の現実の姿がみな、なまなましくて恐ろしいものに思われたのだった。それは彼女にとっては、とても耐えることの出来ない強烈なものだった。

「映画なんて嫌だわ。なんだか出て来る人物がみんな、とても嫌らしいんですもの。きたならしくって、下品よ」

父はそれを聞いて、友紀子の清潔な感情にふれたような気がした。そして、この子はけがれを知らない、本当に清純な娘なのだと思った。そういう清純さは、結婚の条件として最上のものに違いないし、その事はまた直ちに、友紀子の結婚の幸福を保障してくれるものであるようにも思われた。

けれどもそのとき母は、直感的に一種の不安を感じていた。この子の清純さが、果してこのまま宜いものだろうか。清純であって清純さだけしか持たないということは、何かが不足していることではないだろうか。結婚した女の生活は、たといそれがどんなに幸福なものであっても、いつでも清純なものであるとは言えないのだ。結婚は男女関係であり、愛慾の関係でもある。その中に女の天国もあれば地獄もある。美しさもあり、みにくさもあり、策略も犠牲も横暴も、ありとあらゆる智恵の闘いがある。母は自分の生活の歴史をふりかえって見ても、その中には無数のみにくい思い出がたたまれているのだった。妻の生活とは、そうした闘いを耐え凌いで行く生活であるに違いない。友紀子にはそのような結婚生活の複雑さを、耐え凌いで行く力があるかどうか。清純さだけでは結婚生活を支えては行かれないのだ。

考えてみれば友紀子は、芝居や映画もほとんど見ていないし、本も読まない。つまりそういう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものによって、社会や人生の現実を学ぶことをしていないのだった。学校の勉強以外には、手芸をたのしんでやっているだけだった。この子は遅れているのだと、そのとき母は思った。もう二、三年もたてば、普通の娘たちのように、やはり美貌の青年に心をひかれたり、人気俳優のブロマイドを集めたりするようになるに違いない。……

しかしこの時の伸子の直感と不安とは、母の鋭敏な感覚で、友紀子の生涯を予感していたのかも知れなかった。友紀子は十六になり十七になり、女学校を卒業する年になっても、少しも変っては来なかった。女として成長したと思われるような兆候が見えなかった。

彼女に最初の縁談が来たのは十八の年の、間もなく女学校を卒業するという、三月はじめのことだった。父も母も、まだ早いと思っていたが、母は娘を試すような気持で、その話をもち出してみた。

「お前をお嫁さんにほしいという人があるけど、どうする？」

「あら、わたし、もうお嫁さんに行くの？」と友紀子は言った。「だってまだ、着物も何もこしらえていないじゃないの」

「着物のことなんか今からどうだってなるわ。それよりお前の気持はどうなのか、それが聞きたいのよ」

「だって着物が無かったらお嫁に行かれないじゃないの。ねえ、そうでしょう。わたしどんな着物を着るのかしら。髪はやっぱり高島田にするの？……ちかごろ洋装もはやっているのよ。学校のお友達なんか、洋装の方がいいっていう人がたくさん居るの。まっ白のドレスで、長い裾を曳

いて、バラの花束を持つのよ。白い手袋をはめて……」
母はたのしそうな友紀子のおしゃべりを聞いて、ふと溜息を洩らした。この子はまだ何も解ってはいないのだ。嫁に行くということに一種のあこがれを持っているばかりで、そのあこがれも花嫁人形をもてあそぶ少女の幻想でしかないようだ。
「お前ね……」と母は声を落して言った。「……お嫁に行くって、どんなことだか知ってるの？……結婚式って、どんな事をするんだか知ってるの？」
「知ってるわ。神様の前で三三九度のお酒を飲んで、神主さんがお祓いをしてくれるのよ。それからお披露をするんでしょう。途中で一度着物を着かえるのね。わたしどんな着物が似合うかしら。紫は好きなんだけど……。途中で着かえる時に洋装にしてもいいわね。洋装もさっぱりして綺麗よ。駅前の写真屋に良い写真が出ていたわ。知らない人だけど……」
「あのねえ友紀子、……結婚というのはね、男の人のところへお嫁に行くんですよ」と伸子は念を押すような言い方をした。「つまり、その人と夫婦になるのよ。着物のことなんかどうでもいいの。その人と夫婦になって、その人に……可愛がって貰うのよ。お父さんやお母さんと一緒に暮していた時とは違うわ。今度はお前が奥さんになって、一軒の家の主婦になって、暮しを立てて行くのよ。……お前はそういう事を、知ってるでしょう。お友達から聞いたり、雑誌に書いてあるのを見たりしたでしょう。……雑誌、見たことあるわね？」
「いいえ。見ないの」
「だって、婦人雑誌にたくさん書いてあるじゃないの」

「ええ。でも、いやらしいから、あんまり読まないの」
それを嫌らしいと感じていることに、母は可憐なものを感じた。きれいな娘なのだ。心の底まできれいな娘なのだ。婦人雑誌にたくさん書いてある性の秘事に、この子は心をひかれないらしい。もしかしたら十八にもなったというのに、まだ思春期が来ていないのではなかろうか。何かしら発育が遅れているようだ。外からの強い刺戟を拒んで来たために、女としての成育が遅れているのかも知れない。一度、お父さんではなく、よその病院に連れていってみようか……とまで母は思った。
「お前ね、……病室にはいっている女の人たちをいつも見ているだろう。赤ちゃんがたくさん産まれたわね。それから流産の人もあったし、手術をしたり、女の患者の半分以上はみんなそういう人だわね。たいていは結婚した人たちなのよ。解る？……結婚って、そういう事なんだよ。女が結婚するという事はね、ただ式をあげて男の人といっしょに暮すだけじゃないのよ。良人に可愛がられて、その人の子供を産んで子供を育てて行くんだよ。解ってるだろうね？」
「分ってるわ」と友紀子は頬を赤らめて、明るい声で答えた。「だいたい分ってるわ。でもねえ、結婚したからって、何もそんな事をしなくても構わないでしょう。わたし結婚したらその人とよく相談するわ。相談して、そんな事は絶対しないという約束をしてもらうの。そうでなかったら、わたし嫌だわ」
母は自分もまた少女の頃に、そんなことを考えた記憶があった。だがそれはまだ十三、四歳の頃だった。彼女は微笑して、

「それじゃお前は、子供も産まないつもり？……子供はほしくないの？」と言った。
「そうね。一人ぐらいなら、ほしいわ」
「それ御覧。……子供はね、良人から貰うのよ。良人から貰って、女がおなかの中で育てるのよ。その位の事は分ってるわね」
「あら……」と友紀子は小さく叫んだ。「良人から貰うの？」
「当り前じゃないの」
　すると彼女はふっと溜息をついて、
「わたし、結婚なんて、よそうかしら……」と言った。

　友紀子は決して知能のひくい女ではなかった。学校はあまり好きではなかったが、成績はむしろ上の方だった。しかし教師の眼から見ると消極的な、意慾の乏しい生徒だった。教えられたことは素直に学んでゆくけれども、教師に質問をする生徒ではなかった。おとなしくて、平凡で、きれいで、手ごたえの無い生徒だった。
　最初の縁談を聞かされたとき、友紀子はわくわくするような喜びを感じていた。結婚ということに、彼女はやはり華やかなあこがれを持っていた。しかしそれは花嫁衣裳をつけて式をあげるという、美しい儀式に対するあこがれに過ぎなかった。それから先の結婚生活ということについては、どうしても解決できない疑問を感じていた。母が言うように良人に愛されるということ、良人の子供を産むということには、羞恥だか嫌悪だか解らないような気持がつきまとっていた。

彼女は父や母から愛されたような、そういう形の愛情だけで充分だった。男からそれ以上の愛情を受けることはけだもののようで、不潔としか思われないのだった。子供は良人から貰うものだと母から聞かされた時に、彼女は絶望的な衝動を受けた。そして自分が女であるという宿命に身もだえするような気持になった。さらに、母もまた女であり、母が父から子を貰って私を産んだのかと考えると、母がきたならしいものに思えてならなかった。なぜ人間はそんな不潔なことをするのかしら……。なぜ人間は心と心だけで愛しあうことが出来ないのかしらと、四日も五日も考え続けていたのだった。

友紀子は女学校を卒業すると、母にすすめられて生花と琴とを習っていた。ひとなかに立ちまじって派手に動きまわるような娘ではなかったが、稽古ごとの行き帰りに街を通ると、すれ違う人たちがみなふり返って彼女を見た。それほど彼女は人眼に立つ娘だった。いかにも優しげで、京人形のように清潔な美しさを持った女だった。稽古ごと以外にはほとんど家から出たがらない性質だった。

彼女には縁談がいくつもあった。父は彦根の街では人に知られた医者であったし、生活も中流以上にゆたかであったから、相手の方から見れば良縁に違いないのだ。学校を卒業してから三年のあいだに二十もの縁談があった。縁談の数だけ、若くて有望な独身の青年たちが友紀子をねらっていたのだった。

父は気むずかしくて、たいていの縁談は友紀子に相談もしないで断わってしまった。しかし母はまた別の考え方をしていた。友紀子は自分で恋愛をしたり、自分から相手を探して来たりする

ような娘ではない。どうしても親がきめてやらなくてはならない。たとい本人はあまり乗気でなくても、親たちの眼から見て良縁と思われる時には、押し切って結婚させてしまう方が良いのではないだろうか。結婚してしまえば新しく人生に対する眼もひらけて来るだろうし、女とはどういうものかという事もおのずから解って来るに違いない。(わたしだって……)と母は考えるのだった。私だってお嫁に来るまでは、男というものがどんなものだか、女の人生とはどんなものだか、本当のところはなんにも解ってはいなかったのだから……。

花村病院は朝の八時すぎから夜の九時すぎまで、患者が絶えなかった。病室もたいていは一杯だった。夜の九時ごろになって、院長はいつも二人の看護婦をつれて病室をひと廻りする習慣になっていた。肝臓病の老人、胃潰瘍の青年、大腸カタルの子供、子宮癌の中年の女、男の子を産んだ女、心臓の悪い男、淋巴腺炎の少年、転んで頭を打った女の子、まちがって消毒薬を飲んだ男の子。……患者の種類はどれだけあるか解らない。その分だけ医者はいそがしかった。花村院長はまだ五十前で、すもうとりのように肥った大きな男だった。彼が脈をとると、患者の手が小さく見えた。患者のいろいろな訴えをやさしく聞き流すようにして、彼は十六の病室をひとわたり見て廻ると、それから白い診察衣をぬいで、飛石伝いに薔薇(ばら)のアーチの下の枝折戸(しおりど)をくぐって、住居の方へ帰ってゆく。その頃には、伸子がかならず茶の間に酒の用意をして待っているのだった。

一日の疲れを払い落そうとするように、良人が盃をとってひとくち飲むのを見てから伸子は準備していた話を切り出してみるのだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com